



第13回「湖医会賞」受賞記念講演
第4回Home Coming Day・「湖医会」総会
10月25日(土) 13:00～ 滋賀医科大学基礎実習棟B講義室

CONTENTS

「湖医会賞」を受賞して	斯波真理子	2
大学新執行部の紹介	塩田浩平・堀池喜八郎・松末吉隆・藤山佳秀	4
教授就任あいさつ	安藤 朗・九嶋亮治・北川裕利・前田士郎	8
支部会 大阪支部会	江口 豊	12
鹿児島支部会	迫田 悟	13
私の研究から	谷 徹	14
地域の病院に想う	内藤弘之	16
新聞記事にみる		18
キャンパスニュースCatch-Up		19
訃報		21
事務局から	総会の案内 ほか	26

湖医会賞を受賞して

家族性高コレステロール血症とともに

国立循環器病研究センター研究所

病態代謝部 部長 斯波 真理子 (医4期生)



滋賀医科大学にて

私がコレステロールに興味を持ち始めたのは、滋賀医科大学在学中の生化学の鏡山先生の授業がきっかけでした。コレステロールは、細胞膜の成分になるだけではなく、ステロイドホルモンになったり、胆汁酸となったりするなど、身体の中で代謝されながら利用される事実を勉強し、とても面白く感じました。卒業後は、代謝疾患を専門とする当時の第3内科に入局し、同時に大学院に進学させていただきました。臨床研修と同時に基礎研究を始めさせていただき、LDL受容体経路に対するインスリン作用等の研究に従事いたしました。特に基礎研究に強く惹かれるものがあり、大学院修了時にはさらに本格的な基礎研究を行いたいと思うようになりました。

国立循環器病研究センター研究所にて

コレステロール研究のメッカである国立循環器病センター研究所の山本章先生の門を叩きました。研究室においては、理学博士である田嶋正二先生(現大阪大学蛋白研教授)の厳格な指導を受け、研究の基礎を教えていただ

このたびは、栄誉ある第13回湖医会賞に選出していただき、どうもありがとうございます。今回対象となりました研究は、これまで私を育ててくださった多くの先生方、国内外の共同研究者、スタッフ、そして多くの患者様のご指導、ご協力の賜物であり、深く感謝いたしております。また、ご推薦くださった渡邊

聡枝先生、選考委員の先生方にも厚くお礼申し上げます。渡邊先生は、ご自身の病院の設立の極めて多忙な時期に、推薦のお手続きいただきましたことを、重ねて感謝いたします。受賞に際しまして、家族性高コレステロール血症の研究を中心にこれまでを振り返ってみたいと思います。

きながら、一方で家族性高コレステロール血症(FH)ホモ接合体やヘテロ接合体を中心とした臨床にも従事させていただきました。FHは、生下時より高LDLコレステロール血症、皮膚や腱黄色腫を示し、若年性動脈硬化症により、心筋梗塞などの重篤な心疾患を引き起こす遺伝病です。特にFHホモ接合体は重篤であり、スタチンなどのコレステロール低下薬は効果がないため、LDLアフェレシスという体外循環を用いる治療が必要です。FH診療に携わる中で、LDLコレステロール値が著明に高値、皮膚や腱に巨大な黄色腫があることなど、家族性高コレステロール血症ホモ接合体と症状が同じでありながら、皮膚線維芽細胞においてLDL受容体が正常である家系を見つけ、その病態解析結果を報告しました。これが、Autosomal Recessive Hypercholesterolemia (ARH)の世界最初の報告となりました。この病気の原因が明らかになるまでに13年間に要しましたが、最終的にLDL受容体のアダプター蛋白をコードする遺伝子(LDLRAP1)の変異であること、その遺伝子

変異を持つマウスを作成して、高LDLコレステロール血症を再現することができ、さらにLDLRAP1の機能を明らかにすることができました。

FHに対する医療費、啓蒙について

先述しましたLDLアフェレシス治療は、既に保険適応にはなっていませんでしたが、それでも医療費が極めて高いことが患者さん達の負担となっておりました。そこで、FHホモ接合体の患者さん達を中心に、患者会を作成して活動し、最終的にはFHホモ接合体を特定疾患として認可していただき、患者さんの医療費負担の大幅な軽減に貢献することができました。

FHヘテロ接合体は300人～500人に1人という高頻度に認められ、若い年齢から動脈硬化が進行し、心筋梗塞などの重篤な病態を引き起こしてしまいます。まだ日本においては認知度が低く、見逃されている例が多いです。動脈硬化性疾患予防ガイドライン2012では、FHの正確な診断と適切な治療に重点が置かれ、新しいFHの診断基準の作成やガイ

ドライン作成に携わらせていただき、FHについての啓蒙に努めています。また、NHKの「ためしてガッテン」にもFHを取り上げていただき、一般の方々にも知らせる機会をいただきました。

新しい薬剤の開発

脂質低下薬として使用されている薬剤ではコントロールできないFH患者さんのために、現在、新しい薬剤の開発を行っています。通常低分子化合物では効果が期待できない標的分子について、私達は大阪大学薬学部の小比賀教授発案の新規革新的核酸医薬の臨床応用への基礎研究を行い、シーズ化合物の選択に成功し、前臨床研究のための厚生労働科学研究費をいただくことができました。これから3年間で前臨床試験を行い、その後、臨床試験に入る予定です。

最後に

これまでご指導、ご協力いただいた多くの方々に深く感謝しつつ、今後も研究に邁進したいと思います。

大学新執行部の紹介

ご挨拶

滋賀医科大学 学長 塩田 浩平

【略歴】

昭和46年…京都大学大学院医学部卒
 昭和51年…京都大学大学院医学研究科博士課程修了
 国立遺伝学研究所人類遺伝部研究員
 昭和54年…京都大学医学部講師
 昭和56年…京都大学医学部助教授
 平成2年…京都大学医学部教授
 平成19年…京都大学大学院医学研究科長・医学部長

平成20年…京都大学理事・副学長
 平成26年…滋賀医科大学学長
 この間、米国ワシントン大学(シアトル)客員
 研究員、ベルリン自由大学客員教授、英国
 レスター大学名誉客員フェロー等を歴任

専門研究領域：解剖学、発生学、先天異常学



平成26年4月に、馬場忠雄前学長の後任として滋賀医科大学の第7代学長を拝命いたしました。それに伴い、理事、副学長などの執行部体制も一新いたしました。本学は、今年10月に創立40周年を迎えます。また、国立大学が法人化して10年が経過し、大学改革を加速する国の方針が示されました。こうした新しい時代の要請に応じて滋賀医大の更なる発展を期すべく、新執行部は学内スタッフと協力して大学の改革と機構強化に取り組む所存です。「湖医会」会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

創立以来の40年間に滋賀医大を卒業された医師、看護師、助産師、保健師などが4,400名を超え、それらの方々は滋賀県を中心とした各地域で活躍されており、地域の医師会長などの要職に就く方も増えています。また、国内外の医学・医療の現場で優れた研究業績を挙げておられる方もたくさんおられます。社会における滋賀医大出身者の評価は高く、我々の大きな誇りであります。40年の歴史の中で滋賀医大の「伝統」が形作ら

れてきており、卒業生のよりどころである「湖医会」の存在意義が益々大きくなっていくと思われま

す。現在、わが国の医療は少子高齢化、地方の医師不足などの重大な問題を抱えており、厚生労働省は医療機関の機能分化とネットワーク化を進めようとしています。大学と関連病院、地域医療機関の間の密接な連携が重要になってくる中で、「湖医会」の先生方の緊密なネットワークが大きな力を発揮すると確信しています。「湖医会」を核として滋賀医大卒業生が一致協力し、社会で大きな役割を果たしていただくことを期待しています。

「湖医会」の先生方には、滋賀医大の学生の実習、地域「里親」としてのご協力、研修医の指導などで日頃より大変お世話になっておりますが、引き続き滋賀医大の教育・研究・医療活動に対してご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「湖医会」の先生方の益々のご活躍と各同期会や支部組織の御発展をお祈り申し上げます。



副学長就任のご挨拶

平成25年3月に滋賀医大を退職する際、この湖都通信に「定年を迎えるにあたり」と題して執筆し「それでは皆様、ごきげんよう。」と結びました。定年後すぐに介護老人保健施設に施設長として勤めていましたが、このたび塩田学長から理事（副学長、教育研究等担当）に指名され平成26年4月に大学にもどってきました。こうして湖都通信に1年後ふたたび書くことになろうとは……。

さて私の担当のうち教育分野では、医学教育の国際基準への対応が喫緊の課題です。アメリカのECFMGが2023年から（日本の場合2017年入学生からは世界医学教育連盟の基準で認証を受けた大学の卒業生しか申請・受験を認めないと表明しました。この国際基準に基づく評価と認証を受けていない日本の医学科の卒業生はアメリカで研修できず、さらに困ったことに日本での医学教育は国際的には通用しないとみなされます。

2011年全国医学部長病院長会議は国際基準の日本版を作成、2013年に評価実施団体JACMEを設けました。この基準では卒業時のアウトカム（求められる医師像）に基づいた教育内容（具体性・実質性・グローバ

ル性・充実度など）が問われ、最重視点は診療参加型臨床実習72週の実施です。全国の医学部が直面している問題で、滋賀医大の場合、臨床実習を1セメスター分（前期あるいは後期の時間）に相当する17週もふやさなければなりません。ちなみに京大はそのために卒試をなくし、その期間を充てると聞いています。

このような課題やまた入学生の選抜方法、最近の国試合格率の低さなどの問題に対し、大学教員としての経験とこの1年間の体験をもとに、そして学生は学校の宝であることを肝に銘じて対処していきます。

一方研究ですが、今大学は財政的にも人材面でも厳しい状況ですが、個々の研究者の努力が報われるよう、またサイエンスとテクノロジーは別であることをふまえて、一見地味な研究にも光が当たるように心がけます。

学生は楽しく勉強でき地域の方々には喜んでいただける、そんな大学をめざしたい、そう思っています。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

来学の折には気軽に副学長室をお訪ねください。



【略歴】

滋賀医科大学 副学長
(理事[教育・研究等担当])

堀池 喜八郎

昭和47年3月…大阪大学医学部医学科・卒業
昭和49年10月…大阪大学・助手(生化学)
昭和55年11月…滋賀医科大学・助教授(生化学)
平成7年8月…滋賀医科大学・教授(生化学)
平成25年4月…医療法人社団・昂会・介護老人保健施設リスタあすなろ・施設長
平成26年4月…滋賀医科大学・理事(教育・研究等担当)(副学長兼務)

「地域に支えられて世界に羽ばたく」をモットーに、 質の高い医療を提供し、患者さんと共に歩む 病院を目指します

滋賀医科大学 附属病院長(理事[医療等担当]・副学長) 松末 吉隆

【略歴】

1975年…京都大学医学部卒
1993年…京都大学医学部（整形外科講座）講師
2000年…京都大学大学院医学研究科感覚運動系病態学講座准教授
2001年…滋賀医科大学（整形外科講座）教授
2005年…滋賀医科大学附属病院副院長併任
2013年…滋賀医科大学附属図書館長併任
2014年…滋賀医科大学附属病院長（理事/医療等担当・副学長）
専門分野：整形外科学、関節外科（膝、股関節）、スポーツ医学



柏木厚典前病院長の後任として、2月15日付けで病院長に就任しました。附属病院は、法人化後10年が経過し、森田・柏木両病院長の強いリーダーシップの下、職員一同の多大な努力と協力のお陰で右肩上がりの成長を遂げてきました。昨年10月の週刊ダイヤモンド誌の特集「頼れる病院ランキング」で、全国1205の基幹病院中2位、国立大学附属病院中1位にランクされました。これまでの病院長の強い指導力と適切な運営、地域医療機関のご支援、そして病院に勤務する教職員一同の努力の成果であります。

今年、滋賀医科大学は創立40周年を迎えます。附属病院は県下唯一の医科大学としてよき医療人を育成するミッションがありますが、地域医療の中核病院としての役割がこれまで以上に期待されているところです。地域医療への貢献として、特に「がん医療」「新生児・産科医療」「救急・災害医療」の充実に取り組んでいます。がん医療は、滋賀県がん診療高度中核拠点病院として、先進的な取り組みと高度放射線医療機器（PET-CT、リニアック更新）とともにがん診療の集学的治療を行っています。新生児・産科医療では、総合周産期母子医療センターの認可を受け、MFICU（母体胎児集中治療室）を運営しています。

救急・災害医療では、ペリポートを新設し救急救命センター（人材育成）の取得を目指しています。昨年度からホームページに公開しているQuality Indicator（QI）による医療の質向上の取り組みを一層推進していきます。病院の機能分化の流れの中で県内の病院、診療所との連携を一段とすすめて、「高度急性期」への機能を明確化したいと考えます。臨床研究開発センター機能の強化は特に重要と認識し、データ管理の適正化、教授ポストの設置、人的支援、研修の義務化など改革を進めています。また、チーム医療の一層の推進、業績へのインセンティブ、業務負担軽減への取り組みなどにより働きやすくやり甲斐を感じる職場環境を醸成していく必要があります。

患者さんの気持ちを理解し、患者さんの目線で考え、自らに謙虚で技量を磨き、患者さんと一緒に歩む医療を推進します。大学病院は特定機能病院として、高度で先進的医療を推進していく責務や優秀な良き医療人を育成し地域に貢献する義務もあります。このような大学附属病院の重要な役割を推進すべく努力する所存ですので、ご支援の程よろしく申し上げます。

理事(企画・評価等担当) 副学長を拝命して

滋賀医科大学 副学長(理事[企画・評価等担当]) 藤山 佳秀



〔略歴〕

1973年3月…京都府立医科大学卒
 1977年4月…滋賀医科大学内科学第二講座助手
 1988年1月…滋賀医科大学第二内科講師
 (1989年10月～1990年12月 文部省在外研究員:コロラド大学)
 1994年8月…滋賀医科大学内科学第二講座助教授
 (1999年3月～2000年4月 国際協力事業団ケニア感染症研究対策プロジェクト:チーフ・アドバイザー(PL))
 2002年4月…滋賀医科大学内科学講座教授(消化器内科)
 2014年4月…滋賀医科大学理事、副学長

この度、塩田学長より企画・評価等担当理事・副学長を拝命いたしました。その責務の重大さに今更ながらに身の引き締まる思いであります。

本学は、開学40周年を迎えていますが、先輩教職員の方々のご尽力、それにもましての同窓の皆様方の切磋琢磨とご努力により、今日大きく発展し、着実な評価を得てきているところです。一方で、文部科学省は国立大学法人化後のさらなる大学改革を押し進めるべく昨年6月に「今後の国立大学の機能強化に向けての考え方」を示し、各国立大学にその特色・強みに基づくミッションの再定義を求めるとともに、同11月には第3期中期目標期間に向けての「国立大学改革プラン」を策定しています。この改革の基本は学長のリーダーシップによる法人運営にあり、社会の変化に対応した教育研究組織・学内資源配分の恒常的見直し環境の整備、ガバナンス機能の強化、人事・給与システムの弾力化、イノベーション創出のため

の環境整備、人材・システムのグローバル化が重点課題となっています。本学においても医学科・看護学科のミッションを再定義し(本学HP参照下さい)、現在、塩田学長の下、本学の特色と強みを生かしたさらなる発展を目指しての改革が押し進められているところです。

一方、臨床研究では「学長のリーダーシップの発揮」のための運営費交付金特別経費(特別措置枠)の配分を受け、臨床研究開発センターにおいて中川雅生前センター長のロードマップを継承する形でのICTを最大限に活用した臨床研究の支援体制の強化が図られています。「改訂ヘルシンキ宣言(2013年改訂)」、「ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理指針(草案)」等のルールを遵守する形での臨床研究が、今後さらにいっそう活性化されることが期待されます。

同窓会諸氏のご鞭撻とご協力を何卒よろしくお願いいたします。



滋賀医科大学内科学講座(消化器・血液)教授 安藤 朗(医4期生)

— [経歴] —

1984年 3月…滋賀医科大学医学部卒業
 1984年 6月…滋賀医科大学附属病院研修医(第二内科)
 1986年 5月…社会保険滋賀病院内科医員
 1988年 4月…滋賀医科大学大学院医学研究科入学
 1991年 4月…日本学術振興会特別研究員
 1993年 3月…滋賀医科大学検査部助手
 1995年 2月…滋賀医科大学医学部第二内科助手
 1998年 5月…滋賀医科大学第二内科学内講師
 1999年 9月…ハーバード大学・マサチューセッツ総合病院留学(文科省長期在外研究員)
 2005年10月…滋賀医科大学消化器内科講師
 2009年12月…滋賀医科大学大学院感染応答・免疫調節部門(消化器免疫)教授
 2014年 4月…滋賀医科大学医学部内科学講座(消化器・血液)教授

2014年4月1日付けで、滋賀医科大学内科学講座(消化器、血液)教授に着任いたしました。母校の内科学講座を担当することになった重責に身が引き締まる思いです。初代細田四郎教授、馬場忠雄教授、藤山佳秀教授が築いてこられた伝統を継承しつつ、さらなる飛躍をめざして教育・研究・診療に取り組む所存です。

私は1984年(昭和59年)に滋賀医科大学を第4期生として卒業し、当初、血液内科医を志して第二内科(現在の消化器・血液内科)に入局しました。その後、学位のテーマが末梢血単球に関するものであったことから免疫学に興味を抱き、腸管免疫、炎症性腸疾患診療に少しずつ専門がシフトしていきました。白血病補助療法として抗真菌剤経口大量療法を開発したことや新しい赤血球膜蛋白欠損症の家系を発見したことなどは血液診療での懐かしい思い出です。1995年に馬場教授のもと第二内科の助手に採用いただき、本格的な消化器内科とくに炎症性腸疾患の研究、臨床を開始しました。馬場教授からは免疫学にとどまらず、栄養学の魅力、奥深さを徹底的にお教えいただきました。藤山教授のもとでは、理化学研究所との共同研究として腸内細菌研究が大

きく飛躍しました。このような流れの中で、2009年に本学の大学院教授をさらに本年4月に消化器内科教授を拝命し現在に至っております。ここまで230名にのぼる消化器血液内科同門の先生方のみならず、当時の臨床検査部の越智教授、岡部教授をはじめ多くの先生方にご支援いただきましたことに心より感謝申し上げます。

消化器内科領域では、内視鏡診断、内視鏡治療の進歩が著しく、ともすると内視鏡診療技術や画像診断能力の習得に主眼がおかれ、幅広い知識に基づいて病態を解析し治療方針を構築するという態度がおろそかになることがあります。血液内科領域もその多忙な臨床ゆえに研究に向き合う態度がおろそかになりがちです。是非、我々がこれまで取り組んできた臨床課題に立脚した研究活動を伝承することで、臨床も研究もできるリサーチマインドを持った消化器、血液内科医を育成していきたいと考えています。今後大きく発展すると予想される消化器領域における再生医療の展開に備え、消化器、血液両診療科の垣根を越えた基礎研究、臨床研究の展開を目指していきたいと考えています。



滋賀医科大学臨床検査医学講座(病理診断科・検査部・輸血部)教授 九嶋 亮治(医6期生)

— [経歴] —

1986年…滋賀医科大学医学部卒業
 1986年…滋賀医科大学医学部附属病院研修医・医員(検査部、病理学第一講座)
 1989年…滋賀医科大学大学院医学研究科(病理学第一講座)
 1993年…滋賀医科大学病理学第一講座助手
 (この間1995~1996年 デュッセルドルフ大学病理学研究所にドイツ連邦共和国フンボルト財団奨学生として留学)
 1998年…恩賜財団済生会滋賀県病院病理科医長
 2000年…滋賀医科大学臨床検査医学講座助教授
 2003年…滋賀医科大学医学部附属病院病理部准教授
 2009年…国立がんセンター中央病院臨床検査部医長
 2010年…独立行政法人国立がん研究センター中央病院病理・臨床検査科医長・副科長
 2014年…滋賀医科大学臨床検査医学講座(病理診断科・検査部・輸血部)教授

「普通の消化管病理をやりたい」と悶々としていた頃、ある高名な先生から突然「がんセンターに来ないか?」と声をかけられたのが、今から8年ほど前のことである。普通どころか、消化管病理の最高峰で仕事ができる最高のチャンスが到来した。ちょうど大河ドラマでやっていた篤姫が江戸城に嫁入りする覚悟で上京した。京都、滋賀、東京と人生の1/3ずつ過ごしてみるのもいいかな?と思った。

病理医には孤高の人が多いと言われる。以前大学にいた頃は若くして一人部屋をもらっていたが、「大部屋病理医」に戻っ

た。そこには全国各大学から集まる多種多様の病理スタッフ、レジデント、各科臨床医、メディカルスタッフが入り乱れ、専門分野以外にも多くを学んだ。渋谷のスクランブル交差点のような病院で、国内外色々な人々と交流できた。

非常勤としての滋賀医大での講義は年二回だけであったが、10名の学生が築地の病院に研修に来て

くれた。湖医会の関東支部ではスキー部の先輩に銀座の高級店に連れてもらい、水泳部の後輩を築地の寿司屋に連れて行った。

何故帰るの?という人が多かったが、縁あって母校に出戻ってきた。縁は良縁でなければならない。病理



国立がんセンター湖医会(築地・越後寿司にて)。左から二人目が筆者。

医不足は極めて深刻で、愛車で県内各関連病院へ病理診断や剖検のために走り回っていた。残念ながら、基礎の病理学講座と病院病理部の間には見えない壁があったが、これをぶっ壊し、オール滋賀体制で、しかも国内外で武者修行できるような魅力ある病理医育成シス

テムを作りたい。そのためには「検体処理から診断まで病理医がカバーする」という「当たり前の病理診断科」というスタート地点に立たなければならない。

私が母校に戻る直前の3月に初代病理学講座教授の恩師 竹岡成先生が91歳の天寿を全うされた。謹んで哀悼の意を表したい。



滋賀医科大学麻酔学講座 教授 北川 裕利(医11期生)

— [経歴] —

1991年 3月…滋賀医科大学 医学部医学科卒業
 1994年 1月…市立長浜病院 麻酔科医員
 1995年10月…COE特別研究員(国立循環器病センター研究所循環動態機能部血行動態研究室)
 2001年 4月…市立長浜病院 麻酔科部長
 2002年 4月…滋賀医科大学 医学部附属病院麻酔科助手
 2011年 4月…滋賀医科大学 麻酔学講座講師
 2013年 5月…滋賀医科大学 麻酔学講座准教授
 2014年 4月…滋賀医科大学 麻酔学講座教授
 現在に至る

2014年4月1日付けで、滋賀医科大学麻酔学講座の教授に就任いたしました。私は1991年に滋賀医科大学を卒業し、滋賀医科大学麻酔学講座に入局致しました。大学で3年間の研修を終えた後、湖北地方にある市立長浜病院で手術麻酔、ペインクリニック、救急外来や集中治療診療に従事してきました。なかでも心臓血管外科麻酔に興味を持ち、麻酔修練を積み重ねてきました。また、研究領域としても循環生理学を専攻し、国立循環器病センター研究所にて麻酔薬による心臓自律神経機能調節について学んできました。2002年に大学勤務に復帰し、講師(含学内)、准教授として麻酔薬の心保

護効果という課題で、若い医局員と共に基礎から臨床までの研究を行い、実地医療に寄与できる成果を追求してきました。滋賀に地縁のない私を学生時代から計29年間にわたり育てていただいた御恩に報いるためにも、この地で本職を全うできるよう最大限努力してまいりたいと思っています。

ところで滋賀医科大学卒業生の現状を見ますと能力や成果に対する評価が十分でないように感じます。その一因として卒業生同志の繋がりを活かした戦略を上手に利用できていないように思います。私の所属する麻酔学講座でも新医師臨床研修制度が始まってから医局単位での

繋がりが希薄となり、集団としての強みを発揮しにくくなっています。そのため、今後は湖医会などの大学同窓会単位での活動がますます重要になっていくと思います。開学40年を迎える滋賀医科大学同窓生の意見を集約する湖医会活動は大きな強みとなり、滋賀医大卒業生生活躍の大いなる支えになると期待しています。かく言う私も今まで滋賀医科大卒業以後に同窓会を意識し、関わりを持ったことはほとんどありませんでした。これから、私も湖医会会員の皆様と一緒に、母校滋賀医科大学の発展のために全力を尽くしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。





琉球大学大学院医学研究科 先進ゲノム検査医学講座 教授

前田 士郎 (医5期生)

— [経歴] —

1985年……………滋賀医科大学卒業、同大学第3内科入局
 1990年……………同大学大学院修了医学博士
 1993~1996年………ミシガン大学病理学教室研究員
 1999~2000年………滋賀医科大学第3内科文部教官助手
 2000年11月………理化学研究所遺伝子多型センター研究員
 2001年 9月………同センター糖尿病性腎症関連遺伝子研究チーム・チームリーダー
 2008年 4月………理化学研究所ゲノム医科学研究センター内分泌代謝疾患研究チーム・チームリーダー
 2013年 4月………理化学研究所統合生命医科学研究センター腎・代謝・内分泌疾患研究チーム・チームリーダー
 2014年 8月………琉球大学大学院医学研究科先進ゲノム検査医学講座教授

～嵐を呼ぶ男～ 南国での再出発

このたび琉球大学大学院医学研究科先進ゲノム検査医学講座の教授を拝名いたしました5期生の前田です。8月1日に着任いたしました。早速台風(12号)の洗礼を浴びました。私にとっては衝撃的な暴風雨だったのですが現地の人の間では大した台風ではなかったようです。「この前の台風(8号)の時には駐車場の軽自動車転がっていった」などと驚かされているうちに、今度は台風11号が非常に強い勢力を保ったまま沖縄本島に接近し(私だけが?)戦々恐々としておりました。が、この台風は沖縄本島からはそれていき、その後本土で猛威を發揮し大きな被害をもたらしたのはご承知のとおりです。

さて、学生時代あるいは研修医時代の私を知る人は「あの士郎が……」と非常に驚いていることでしょう。あまりの変貌(?)ぶりに世の中どうなっているのだろうと心配されているかもしれないのですが、就任が決まってから現在に至るまで、多くの先輩、同級、後輩の先生たちからお祝いと激励のお言葉を頂戴いたしました。この場を借りて御礼申し上げます。沖縄県では琉球大学を中心とした新規事業として「琉球ゲ

ノムプロジェクト」が提案されており、今回はその立ち上げの任に当たることになっています。ヒトゲノム研究はここ数年で飛躍的に進歩し、巷にはゲノム情報を利用した医療ビジネスが溢れつつあります。しかしながら肝心のゲノム情報はまだまだ未成熟なうえに、環境因子との相互作用といった非常に重要な課題が全く検討されていないのが現状です。私は沖縄の地において大規模なゲノムコホートを構築し、ゲノム情報と環境因子を総合的に解析し、さまざまな疾患についてオーダーメイド医療を実現するべく尽力していきたいと思っています。滋賀医大を14年ほど前に離れたのち、理化学研究所で中村祐輔先生のご指導のもと、糖尿病関連のヒトゲノム研究に携わってきました。私ひとりでは成り立たない仕事で、多くのご協力ご支援のお陰で続けることができました。これからも、そのネットワークを生かしつつ、さらに沖縄の地においても多くの協力者を募り、世の中の役に立つ研究にしていきたいと思っております。どうか、これからも温かいご支援をよろしくお願い申し上げます。

支部会

大阪支部

大阪支部会報告

滋賀医科大学救急集中治療医学講座 教授 江口 豊 (医2期生)



平成26年6月22日(日)14時半から、ホテルグランヴィア大阪にて「琵琶湖カンファレンスin大阪2014」が「湖医会」大阪支部(代表世話人1期生仲谷整形外科クリニック院長仲谷吉記先生)の学術研究会(事務局;本学救急集中治療医学講座)として第一三共(株)との共催で開催された。

会に先立ち、世話人会が行われ、次回から当番世話人制とし、江尻新太郎先生(5期生あさかぜ診療所院長)が担当すること、基調講演は「湖医会」大阪支部の所属する勤務医と開業医から各1名、特別講演は本学の新任教授(消化器・血液内科安藤朗教授を予定)にお願いする案が採択された。

今回、基調講演として、2期生ふくだ内科クリニック院長福田正博先生から「かかりつけ医における糖尿病の治療戦略」、2期生宝塚市病院消化器内科診療部長阿部孝先生から「消化管出血の内視鏡診断と治療」

の演題名で、長年にわたりご活躍されている医療についてご講演をいただきました。

特別講演では、3期生本学生化学・分子生物学講座再生・修復医学部門教授小島秀人先生から「糖尿病で出現する奇妙な骨髄由来細胞」の演題名で、最新の研究内容について興味あるご講演を賜りました。

その後情報交換会が行われ、出席者17名で和んだ雰囲気の中にも活気あふれる盛会となりました。

次回は来年6月開催予定で「同学年の先生方に連絡を取り合ってまた集まろう」と声を掛け合って散会となりました。(出席者名(敬称略);1期:仲谷吉記、谷村博久、2期:福田正博、阿部孝、江口豊、3期:小島秀人、5期:江尻新太郎、山内英二、7期:池淵元祥、小堀肇彦、10期:近藤浩之、13期:京川進、14期:吉田康弘、18期:岡田明、27期:加藤文崇、34期:松永隆志)



支部会

鹿児島支部

第4回鹿児島支部会開催

愛甲医院 迫田 悟(医1期生)



滋賀医科大学5期生である西尾善彦先生の鹿児島大学大学院糖尿病・内分泌内科学教授就任を機に、滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を発足してから早3年になります。

6月21日土曜日、4回目となる滋賀医科大学同窓会鹿児島支部会を開催しました。会場は今年も、西郷隆盛がその生涯を終えた地として知られる城山に位置し、鹿児島随一のホテルである城山観光ホテルを確保しました。

会の始めに、西尾先生に「魚の効用」という演題で特別講演を行っていただきました。私の場合、普段、魚料理が食卓に上がることがめったになく、今から魚料理を食べても手遅れかもしれない、と思いながら先生のお話を拝聴していました。サンマの缶詰でも良い、天然物よりイワシを餌に育つ養殖の魚のほうが良いかもしれない、という先生の余談が強く耳に残りました。

講演終了後、西尾先生による乾杯の音頭の下、懇親



会を開始しました。鹿児島県内には、現在13名の滋賀医科大学卒業生が在住しています。今回は1期生から8期生まで、合

わせて6名が参加しました。また、今回も湖医会会長の渡辺先生(2期生)が滋賀から飛んできてくれました。

鹿児島の地にいると、学会などで東京まで足を伸ばす機会は度々あるものの、関西に足を運ぶ機会にはなかなか恵まれません。また卒業して三十数年ともなると、日々の仕事に忙殺され、大学時代を思い出すこともそう多くありません。そんななか、年に1度、同じ滋賀医科大学卒業生として滋賀から遠く離れた鹿児島で集まることは、当時に思いを馳せることができるとともに、同じ境遇の者同士とても励みになります。また、支部会も4回目を数えると、卒業年度こそ幅広く職場も様々ですが、一種の結束感のようなものがより強くなってきたと感じられました。3年前から鹿児島に在住している西尾先生も、今ではすっかりこの地に馴染んでおられるようで、喜ばしい限りです(桜島の火山灰にまで慣れていただいたかどうかは疑問ですが)。

今後、こうした形で微力ながら湖医会、そして滋賀医科大学を盛り上げていければという思いを胸に、城山を後にしました。

私の研究から

きっかけは臨床での 改善志向



特別会員 滋賀医科大学 名誉教授
バイオメディカルイノベーションセンター
特任教授 谷 徹



このタイトルにふさわしい私の研究スタートは、前任の小玉正智教授からの「人工肝をやりなさい」の一言から始まった。研修を終えて滋賀医科大学外科学講座に入局した私は研究などしたことはなく、外科は臨床だけだと考えていました。しかし 先の言葉で大学院に入ることも決まり、研究が始まりました。

研究のきっかけは、当然“人工肝”という勉強からでしたが、医局に来る製薬会社員との何気ない話がヒントとなりました。代表的な例として、発売から20年近く経ってフランスやアメリカで臨床治験が行われ、世界で使われているトレミキシン（ポリミキシン固定化ファイバーカラム）については、彼らの「ポリミキシンはエンドトキシンとくっつきやすい」という一言がヒントとなり始まり、同時にこのカラムを血液灌流法の際に使う抗凝固剤は、FUT-175をDICの薬として説明にきたMRさ

んの「凝固因子も制御するんです」の一言から研究が始まった。そしてヘパリンを吸着する陰イオン交換樹脂等の血液浄化カラム用や、出血傾向のある患者さんへの局所抗凝固剤として広く臨床で使われることになった。

これらの研究過程で経験したのは仲間と新しいものに向かって協力する体制とその人間関係や企業との重要な関係をどう構築していくかという今までに無い経験であった。このように、構想から製品化まで一貫したプロセス(Success Story)を経験した。この経験が生きてトレミキシンを臨床で使う立場が外科医から救急医へと移るのを潮目に、私自身も外科学講座を任せて頂ける立場になった事もあってこの研究から遠ざかると同時に次のテーマに移る事となった。

新しいきっかけとなったのが本学に導入された“垂直型のオープンMR”であり、「被曝が無い画像モニター」の一言で将来これしかないと思えるに至り、この被曝の無い画像モニターとして将来の手術ナビゲーションに移行できることを確信して今日までの研究が始まりました。

2003年頃、科学技術振興調整費で億単位の補助金を初めて頂き、リアルタイムに三次元MR画像を用いた“次世代の手術システム”を構築する研究と、その時に使うマイクロ波機器開発がこのプロジェクトでその基礎をほぼ確立することができました。マイクロ波のエネルギーに着目したのも“MR画像を干渉しないエネルギー”ということで始まったのですが、組織を凝固焼却できるエネルギーであるにもかかわらず、針以外のデバイスが世界中に何も無いのを不思議に思い、マイクロ波でもハサミのように切れるデバイスが出来るのではないかと単純に考え、長年マイクロ波器具開発に従事されていた老技師さんに簡単な機器を試作してもらいました。そして、仲准教授に肉を切ってもらったところ「これはいけますよ」という一言でマイクロ波のデバイス開発を決心するに至りました。現在はマイクロ波エネルギーを新規医療用エネルギーとして捉え、既存エネルギーの手術支援機器全てを網羅するデバイス開発と、現在無いデバイス開発も含めた事業展開を進めており、後暫くで市場にマイクロ波デバイスが上市される予定となっている。

一方で次世代手術システムは、動物用のMR導入後

もプロジェクトを次々頂き、現在バイオメディカル・イノベーションセンターにおいて革新的医療システム開発部門の特任教授として5年間をかけてこのミッションを完成させる立場を頂いた。つまりプロジェクトにアプライしながら、アメリカのハーバード大学、ジョンズホプキンス大学等と協力して世界で初めての動物実験に成功した本学開発システムを5年間で臨床に使える装置に持って行く仕事を遂行している。

最終講義でも述べたように、研究は最初アイデアで始まるが、私自身アイデアマンと言われるのは好まない。何か軽くてその場で思いついただけという感じがするが、一つの開発には10年以上の月日を要し、多大な人の協力が必要となるからである。

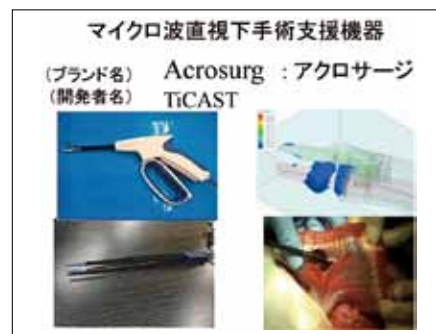
今は自分たちの研究が現在の日本に求められるイノベーション創生に繋がる研究開発となることを期待している今日この頃であります。

【図-1】



図-1は、現在トレミキシンの販売されている国と大規模臨床試験が実施されている国をお示しています。現在では、ヨーロッパ以外に、インド、ロシア、トルコ、台湾、韓国でも使用が開始され、計10か国で販売がスタートしています。

そして、比較臨床試験RCTとして、フランスでABDO-MIX Study と呼ばれる臨床試験が、北米でEUPHRATES Trialとよばれる臨床試験がそれぞれ進行中です。また、イタリアを中心に、EUPHAS2と呼ばれる症例登録研究がすすめられています。以下の図で、それぞれの内容についてご紹介します。



地域の病院に想う

日野の戦国武将 蒲生氏郷



日野記念病院外科 副院長
内藤 弘之 (医7期生)

日野記念病院は昭和60年4月、日野町誘致病院として開設されました。その後3回の増改築が行われ、本年7月、新病棟、新手術室の稼働が始まったところです。

現在、外科常勤医は4名で、なんと全員滋賀県出身。外科部長は草津市、乳腺外科医長は近江八幡市、一番若手の6年目の外科医は愛荘町、小生は大津市坂本です。また、ひとりは大分医大卒後滋賀医大外科に入局しましたが、残り3人は滋賀医大出身です。まさに滋賀県地域医療に貢献すべく選ばれし人材と自負しております。

蒲生郡日野町は滋賀県の南東部、鈴鹿山系の西に位置する町で霊峰・綿向山を東に望む自然環境にとっても恵まれた町です。現在、日野町の住民は2万人あまりですが、東近江市、竜王町、甲賀市、愛荘町などからも受診されています。

日野町は室町時代、蒲生氏の城下町となって歴史の表舞台に登場してきました。繁栄の基礎を築いた蒲

生氏は400年以上この地を治め、商工業の保護、育成に努力し、鉄砲や鞍などを特産品として生み出したとされています。そのなかで特に有名なのは、日本100大武将にも選出されている蒲生氏郷公です。信長の

娘冬姫を妻とし、その後秀吉に仕えた蒲生氏郷は日野町の産業発展に貢献、近江商人の礎を確立したとされています。いまNHKの大河ドラマで「軍師官兵衛」をやっていますが、黒田孝高(官兵衛)に負けず劣らず、知将として知られる存在となっていました。

一方で、戦国時代の闘将としても多くの活躍をしています。明智光秀が本能寺の変で信長を倒した際、安土城にいた信長の妻子を真っ先に保護したのは氏郷でした。姉川の戦い、長篠の戦い、朝倉攻め、賤ヶ岳の戦いなど、記載しただしたら限がないくらいの戦いで多くの武功を挙げています。

合戦の際、氏郷は決して後方にいて家臣に命令を下して戦わせる、といったことをせず、自分が真っ先に敵陣に突入する、という信念を持っていたそうです。氏



銀鯨尾兜

郷の兜は「銀鯨尾兜(ぎんなまずおかぶと)」といい、形状が特徴的ですが、これは敵からも見方からもすぐに氏郷とわかるようにするのが目的だったようです。実際の言葉として、合戦の前、家臣に「銀鯨尾兜が先陣して戦っていればそやつに負けぬよう戦い抜け」と語っていたそうです。もちろん銀鯨尾兜をかぶり先陣して戦っているのは氏郷本人のことです。秀吉が氏郷を評して「蒲生氏郷軍10万と織田信長軍5千が戦えば勝利するのは織田軍だ。蒲生側が織田兵4千の首を取っても信長は生きて戻るが、織田側が5人も打ち取れば氏郷の首が含まれるからだ」と語ったとのこと。秀吉は氏郷を大変かっていたので氏郷の先陣を切る勇気をたたえて、少しからかって述べた言葉です。その後、秀吉は、強敵、奥州の伊達正宗を抑えるために氏郷を陸奥会津の藩主として据えました。これは天下統一をもくろむ秀吉には、伊達正宗を抑えることが重要で、その役目となった蒲生氏郷に対する秀吉の信頼が伺えます。その後度々伊達正宗とは小競り合いをしつつも伊達正宗の動きを封じました。残念ながら1592年体調を壊し、1595年2月7日、伏見の蒲生屋敷で病死、享年40歳でした。秀吉は自分の主治医はもちろんのこと、前田利家や家康にも名のある医師を派遣するよう命じたとのこと。氏郷を診察した医師のカルテには黄疸、浮腫、との記載があり、経過も長いことより死因は悪性腫瘍、肝硬変などと考えられているようです。氏郷の辞世の句は「限りあれば吹かねど花は 散るものを 心短き 春の山風」花びら(ひとの命)は風など吹かなくてもいずれ散るものだが、どうして短気に風が吹いて散らす(死を迎える)のだろう、まだまだ武将として活躍できる矢先の死に、悔いる辞世です。もし元気であれば天下統一は徳川家

康ではなく蒲生氏郷であった、と語る武将も多くいたとのこと。

この歴史ある日野町の150床の病院で、外科、脊椎センター、整形外科、など年間1200件以上の手術を行い、雑多な日々を送っていますが、医師どうしの垣根が低く、助け合いの精神で頑張っています。また看護師、放射線技師、薬剤師、検査技師、臨床工学技士、理学療法士、事務職などのコメディカルも大変協力的で、とても助けられています。現在、日野町を含めた東近江医療圏はまだまだ多くの問題を抱えています。滋賀医科大学の協力なしには改善の目途は立ちません。湖医会の先生、関係者の方々におかれましては何卒宜しく願い申し上げます。

今後も、蒲生氏郷公の自ら先陣を切って闘う精神をここに刻んで、地域医療に貢献できればと思っております。



蒲生氏郷公銅像

新聞記事にみる

いわき市立総合磐城共立病院リエゾン科(精神科)
主任部長 池本 桂子先生(医5期生)

日 新 聞 【新聞定価1ヵ月 3,093円(本体価格2,864円+消費税229円)】1部売り(消費税込み)140円 (第3種郵便物認可)

長引く避難 福島の子殺未遂者 年々増加

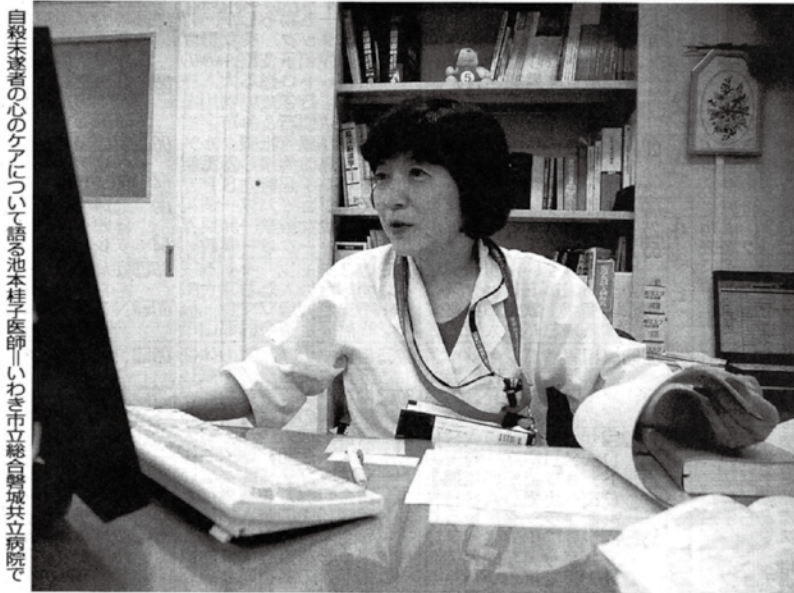
「大変だったね」。
池本医師が声をかける
と、10代の少年は黙っ
てうなずいた。
少年は今年5月、自
宅で自殺を図り、同病
院の救命救急センター
に運ばれた。自宅は震
災で全壊。家族で避難
した直後から、両親の
不和が深刻になった。



東京電力福島第一原発から最も近くに
救命救急センターで、一人の女性医師が自殺
未遂者のケアにあたっている。福島県いわき
市の市立総合磐城共立病院(828床)の精
神科医、池本桂子さん(54)だ。原発事故によ
る避難生活が長期化するなか、心の不調を抱
える被災者たちと向き合ってきた。東日本大
震災後に診察した自殺未遂者は、170人を
超える。

「あなたのせいじゃない」

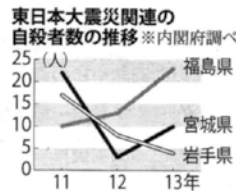
寄り添う女医 孤軍奮闘



自殺未遂者の心のケアについて語る池本桂子医師(いわき市立総合磐城共立病院)

察した自殺未遂者は1年目は59人と増加し
63人。このうち震災は、4年目となる今年
当日からの1年間に診 3月11日から5月末ま
診した人は46人だった。では11人になる。
が、2年目は58人、3 避難生活をきっかけ

とする家族のあつれき
や、放射線の影響で農
業ができないことへの
生活不安など、震災や
原発事故が動機に関わ
っている人が半数を占
めるという。池本医師
は「被災から時間がた
っても解決の見通しが
たない不安が、要因
になっている」と話す。
今年春に、搬送され



東日本大震災関連の自殺者数の推移 ※内閣府調べ
福島県 宮城県 岩手県
11 12 13年

岩手、宮城は自殺減少

内閣府は、東日本大震災に関連する自殺者数を公表している。それによると、福島県では11年10人▽12年13人▽13年23人と増加。今年5月までに8人と「自損行為」で出動した件数は把握している。宮城県のピークが震災の起きた11年だったのに対し、福島県は年々減少傾向にあるが、福島県では13年が前年比5・7%増の962件だった。被災3県は被災者の心のケアにあたる拠点をづくり、仮設住宅や避難者を対象に臨床心理士や精神保健福祉士による訪問相談を実施している。

た30代の女性。原発事
故後、父親は仕事のた
め福島に残り、母親は
関東へ避難した。その
人を支える体制も十分
とはいえない。震災直
後はいわき市内でもよ
く見かけた応援の精神
科医は、ほとんどいな
くなり、同院が募集し
ても応募がない。「少
数の踏ん張りだけで被
災地の心のケアは支え
きれない。もっと組織
的な支援が必要だ」と
池本医師は訴える。

キャンパスニュース Catch-Up

滋賀医科大学2013 ACTIVITY DIGESTから

全人的医療体験学習履修の学生を患者等が評価

全人的医療体験学習で1年半にわたり患者宅を訪問した医学科2年生23人に対し、患者さん及びその家族から、学習についての評価を受けました。

評価はいずれも大変好意的なもので、学生の今後の学習にとって励みとなりました。

患者さん&家族の方々からの評価

- ・常にノートを手に記録をとり、患者の言葉を逃さず受け答える態度には好感が持てた。
- ・熱心に話を聞いて下さった事が、良かった。又、急に障害者になった父への精神的な配慮もして頂きました。
- ・勉強しよう、患者の気持ちに添おう、という態度がありがたかった。
- ・会話のみでなく、患者の脈拍を取ったり、体温を測ったりすることにより、患者との繋がりも深まり、会話の質も向上するのではないかと思った。

指導医等からの評価

- ・患者と家人の会話を十分時間をかけ、家族の問題点を的確に指摘できた。
- ・1回1回の反省点を次回に修正してきており、積極性を認めた。
- ・患者様の気持ちを理解し、わかりやすい言葉で励ましていた。
- ・担当患者さんの死に対しても、奥さんとしっかり向き合うことができていた。
- ・医療に対してしっかりとした意志を持っている。

アジア疫学研究センターを開設

本学は、循環器疾患基礎調査、国民栄養調査の長期追跡調査NIPPON DATAの実施など、我が国の生活習慣病疫学研究において中心的な役割を果たしてきました。それらの成果を踏まえ、今後、アジアにおける疫学研究の拠点となって、循環器疾患及び糖尿病を中心とした各種疾患に関する最先端の疫学研究、国際共同疫学研究の推進を図ることを目的としてアジア疫学研究センターを開設しました。

- 海外からの実績ある疫学研究者等を教員として招聘。
- アジア諸国の研究者を本学大学院博士課程「アジア非感染性疾患(NCD)超克プロジェクト」により生活習慣病疫学の専門家として育成。

平成25年10月2日、アジア疫学研究センターの開設を祝し、国際シンポジウムを開催しました。

プログラム内容

(基調講演)

- Paul Elliott (インペリアルカレッジロンドン教授)
「国際疫学共同研究INTERSALT、INTERMAPにおける方法論とその成果」
Robert D. Abbott (本学アジア疫学研究センター特任教授)
「日米の循環器疾患危険因子・異文化間比較の試み」

(アジア国際シンポジウム)

- 「アジアにおけるNCDと今後の研究課題：公衆衛生および疫学の観点から」
岡村 智教 (慶応義塾大学教授)
Nguyen Duy Phong (ホーチミン医科薬科大学准教授)
Noor Azah Abd Aziz (マレーシア国民大学教授)
Sohel R. Choudhury (バングラデシュ国立心臓財団病院研究所教授)
Chimedsuren Ochir (モンゴル健康科学大学教授)



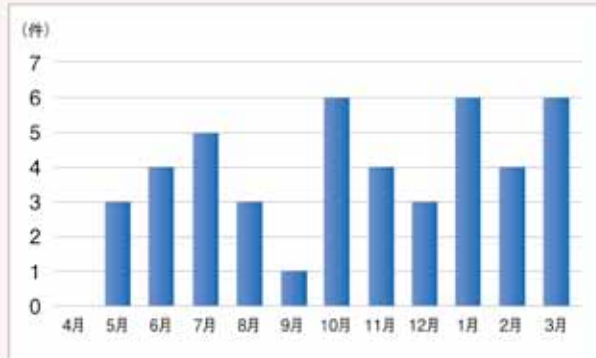
キャンパスニュース Catch-Up

内視鏡手術支援ロボット ダ・ヴィンチを導入

滋賀県では初めてとなる内視鏡手術支援ロボットdaVinci（ダ・ヴィンチ）サージカルシステムを導入し、5月から稼働を開始しています。

内視鏡手術支援ロボットは、医師が3D画像を見ながらロボットを遠隔操作することにより、安全で正確な手術を行うことが可能となります。

平成25年度は、泌尿器科の前立腺摘出術を45件実施しました。



救急医療・災害医療の体制整備

滋賀県災害拠点病院として、ヘリポートを新設しました。
また、救命救急センターの指定に向けた体制整備を進めています。

平成25年度の救急車搬入患者数は、2,504人で、他病院からの重症救急患者を積極的に受け入れています。

平成25年4月より総合周産期母子医療センターとして県の認定を受け、MFICU*（6床）を開設しました。
多くの母体搬送を受け入れ、出生後から加療が必要な新生児に対して積極的な治療にあたっています。

*MFICU（母体胎児集中治療室 Maternal Fetal Intensive Care Unit）とは、重い妊婦中毒症や胎児異常など、ハイリスク出産の危険度が高い母体・胎児に対応するための設備と医療スタッフを備えた集中治療室の略称。



ヘリポート

「滋賀医科大学女性研究者賞」及び「女性研究者支援員制度」の創設

優秀な女性研究者の研究活動を表彰することを目的として、「女性研究者賞」を創設し、8名の応募の中から、代表論文の評価や研究の獨創性、発展性など厳正な審査を経て3名の教員を選出し、平成25年10月1日、賞状と副賞を授与しました。

最優秀賞 麻酔科助教 小嶋亜希子「麻酔薬の心筋保護メカニズムについての研究」

優秀賞 眼科講師 村木早苗「杆体一色覚で見出された網膜錐体cGMP依存症カチオンチャンネルA3サブユニットのミスセンス変異の機能的解析」

臨床看護講座講師 森本明子「2型糖尿病発症までのインスリン分泌能・抵抗性・糖代謝能の自然史の解明—インスリン分泌不全者に着眼して—」

また、育児や介護等により研究時間の確保が困難な女性研究者の研究継続を支援するため、「支援員制度」を創設し、3名の研究者に対し研究支援者を配置しました。

女性研究者賞の受賞



村木講師

小嶋助教

森本講師

TOPICS

江口教授が滋賀県救急医療功労者知事表彰を受賞しました。

江口教授は、本院救急・集中治療部長としての医療活動に加え、滋賀県消防学校の非常勤講師を務めるなど、救急医療体制の整備・充実に貢献したとして表彰されました。

救急医療週間の平成25年9月10日、滋賀県庁において「救急医療功労者表彰式」が行われ、江口教授は「滋賀県は南北に長いので、都市部以外でも診療ができる医師を育てることが重要。救急医にとどまらず、急性期疾患に対応できる医師を育てていきたい。」と語りました。

TOPICS

〈学内施設の整備状況〉



臨床講義室

臨床講義室: 建築後35年が経過しており、経年劣化による老朽化が著しく、機能面にも問題があったため、改修整備を行いました。以前は急こう配で使いにくかった床の傾斜を緩やかにし、座席数も増加、明るい雰囲気のある講義室に生まれ変わりました。最新型の空調照明機器を導入し、壁や窓の断熱性能も上げて環境にも配慮しています。



福利厚生棟

福利厚生棟: 耐震補強を中心とした改修工事を行いました。併せて、多様な用途に対応した学習・交流スペースを整備したほか、車椅子対応エレベーターも設置しました。最新型の空調照明機器を導入し、壁や窓の断熱性能も上げて環境にも配慮しています。



体育館

体育館: 災害時には避難所としての機能も期待されており、今回の改修では天井に設置されている照明や球技施設の落下防止対策を施したほか、バリアフリー便所や暖房設備を整備しました。経年による劣化が目立っていた床や壁面も修繕しました。



訃報 謹んで哀悼の意を表します。

- 平成26年3月21日 寺澤 祐介 (看4期生)
- 平成26年6月1日 日下 荘一 (医22期生)
- 平成26年3月23日 竹岡 成 (特別会員：元病理学第一講座)
- 平成26年4月21日 七川 歆次 (特別会員：元整形外科学講座)
- 平成26年7月17日 宮本 英男 (特別会員：元英語)

2014年度「湖医会」総会のご案内

日時／平成26年10月25日(土) 15:00～

場所／滋賀医科大学基礎実習棟B講義室

議 題

1. 2013年度事業計画
2. 2013年度決算
3. 2014年度事業計画
4. 2014年度予算
5. 役員改選
6. その他

「第29回日本医学会総会2015関西」 開催のお知らせ

2015年春、「第29回日本医学会総会2015関西」が京都をはじめ関西全域で開催されます。当総会では特定領域の専門的議論に偏ることなく、今日の社会が直面する20の医療課題について分野横断的な議論が行われる予定です。

現在、事前参加登録受付中で、10月31日(金)までは早期登録特典があります。登録は医学会総会ホームページからお早めに(<http://isoukai2015.jp/>)。

年会費について

(2014年度分から一部取り扱いが変更になりました。)

●医学科卒業会員

会費の割引…自動引き落とし(口座振替・VISAカード)のすべての利用者は、年会費6,000円が5,000円に割引となります。

会費の免除…40年(40回)分を納入したとき、あるいは、満65歳に達しそれまでの会費を完納しているとき(本人からの申し出による)は、以後の会費は免除となります。

お知らせ

「湖医会」年会費の自動引き落とし

口座振替をご利用の方は10月12日、
一般VISAカードの方は10月15日となります。



なお、便利な口座引き落としのご利用を
ご希望の方は事務局までご連絡ください!!

お名前・住所・開業・勤務先・メールアドレス等を変更の場合は、メールまたはファックスで事務局まですぐにご連絡ください。

表紙の写真：新設のヘリポート